

「チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学文学部3年 丹羽 功貴

私はタイをはじめとする東南アジアにおける労働、人の移動などに強い関心があり、大学の研究ではこれらの分野を専門にしたいと考えていましたが、実際に現地でそのような分野に関するフィールドワークを行った経験や、実態を自分の目で見るような体験を今までにすることがなく、文献などによる知識しか持っていない状態でした。そのため、今回の研修は、実際に現地へ赴き自分の目で見たり、現地の大学生と意見交換したりすることでタイの社会や文化に関して広く知ることを目的として参加しました。結果として、実際にタイの様々な場所を訪れることができ、さらに多くの現地の学生と意見を交換することができ、極めて充実した研修となりました。

今回の研修では、日々のタイ語学習やフィールドトリップに加えて、タイと日本の文化交流の一環として、チュラーロンコーン大学の文学部日本語学科の学生とともに両国の文化に関する合同発表会を行うプロジェクトがありました。タイ人学生とグループになり、合同発表会の準備をする中で彼女たちと多くのディスカッションを実施することができました。我々は発表テーマを「タイ人と日本人のドラマにおける嗜好の違い」とし、それぞれの国のドラマの違いについて意見を交換する中で、タイ人学生からタイ社会の実態について聞くことができました。トピックとしては、タイ社会の賃金格差や所得格差の問題や、タイで生活する移民の問題など多岐に渡り、またそれらの問題に対するタイ人学生の意見や社会の反応についても伺うことができました。それらの中でも特に印象に残っているのは賃金、所得格差の問題についてでした。地域間の所得格差がタイにおける極めて大きな社会問題であることは以前から知っていましたが、タイ人学生から聞く田舎の地域の人々の生活の実態には文献を読むだけでは感じることはできない生々しさがあり、問題の深刻さを実感することができました。また同じバンコクにおいても、コンビニエンスストアのアルバイトの賃金がおよそ時給30バーツ(日本円で約100円)であるのに対し、大学生の家庭教師の時給がその10倍近くもあることを聞いたときは、その圧倒的な賃金の差に愕然とすると同時に、学歴や専門技術を持っていない人々に対する社会からの極端すぎる評価の低さを知り、タイ社会について改めて強い問題意識を抱くことができました。

また、チュラーロンコーン大学の学生と共にプレゼンテーションを行うことができたことは非常に良い経験となりました。一般的な日本の学生とは異なり、チュラーロンコーン大学の学生は大学の課程で数多くのプレゼンテーションをこなしているため、効果的で魅力ある発表の技術を有しており、プレゼン力に非常に長けていました。彼女たちと発表準備を行うことで高度なプレゼンテーションの技術を学ぶことができました。ただ、学術的なディスカッションや準備の進め方に関して意見が合わないこともあり、やや戸惑うこともありましたが、しかし、苦悶しながらも彼女たちと話し合いを重ねることで一つの完成されたプレゼンテーションを作り上げることができ、大きな達成感を抱くと同時に、文化が異なる人たちとの共同作業を行う能力を向上させることができました。

2週間という短い期間のなかで、自身の学術的な知見や技術を向上させることができ、非常に充実した研修となりました。タイの社会を目の当たりにすることで、東南アジアに対する自身の問題意識をより強いものにすることができましたが、より確かな知見を得るためにもっと現地に赴く必要があること、もっと現地の人と関わりを持っていかなければならないことに気づくことができました。今後の学問活動では、今まで以上に具体的な問題に関心を絞り、文献調査やフィールドワークに対してより緻密な取り組みをしていきたいと思えます。

最後になりましたが、今回の研修につきまして、多方面で調整してくださった京都大学及びチュラーロンコーン大学の教職員のみならず、現地での生活やフィールドトリップなどでサポートしてくださったチュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座の学生、合同発表会にて共に発表してくださったメンバーのみならずには、大変お世話になり、感謝しております。

す。この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。